

日本英文学会関東支部
第14回（2017年度夏季大会）
プログラム

日時：2017年6月17日（土）

会場：明治学院大学白金キャンパス

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

アクセス

JR「品川駅」より、バス約6分（「明治学院前」下車）／徒歩約17分

JR「目黒駅」より、バス約6分（「明治学院前」下車）／徒歩約20分

東京メトロ南北線・都営三田線「白金台駅」「白金高輪駅」より、各々徒歩約7分

都営浅草線「高輪台駅」より、徒歩約7分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail:kanto@elsj.org

11:30—	開場・受付 11:30— (本館 3 階) / 13:45— (2 号館 B1) / 16:00— (同 2 階)		
研究発表	第 1 会場 (1355)	第 2 会場 (1356)	第 3 会場 (1359)
12:15 12:55	民主主義は勝利したのか —Caryl Churchill の <i>Mad Forest</i> (1990) と 1980 年代末の 東欧社会主義国家の消滅 (発表) 金田迪子 (司会) 谷岡健彦	We are mediums: Ann Quin の <i>Passages</i> にみられる 語るモノとしての存在 (発表) 西野方子 (司会) 川本玲子	『靴屋の祭日』の祝祭性 (発表) 田邊裕子 (司会) 小町谷尚子
13:05 13:45	否定・歪曲・パステージュ — <i>The Real Thing</i> と <i>A Map of the World</i> の劇中劇 (発表) 小田島創志 (司会) 谷岡健彦	<i>Memento Mori</i> における 1950 年代と高齢者問題 (発表) 畑中杏美 (司会) 川本玲子	『テレニー』における テレパシー的「流体」と 過剰な親密性 (発表) 中嶋英樹 (司会) 遠藤不比人
14:00 16:00	英米文学部門シンポジウム (2101) ヘリテージ映画と国家のイメージ —それはいかに原作を アダプトしているのか (司会・講師) 丹治愛 (講師) 小山太一・岩崎雅之	英語教育部門シンポジウム (2102) 英語教育と文学教育のはざまで (司会・講師) 倉林秀男 (講師) 河田英介・山本裕子 (指定討論者) 原田範行	
16:15 17:45	特別講演 (2302) Sensibility, slavery and empire (講師) Markman Ellis (司会) 吉野由利		
18:00 20:00	懇親会 (本館 10F 大会議室)		

【研究発表】 12:15-13:45 (第1発表 12:15-12:55 / 第2発表 13:05-13:45)

第1会場 本館 1355 教室

第1発表

民主主義は勝利したのか

——Caryl Churchill の *Mad Forest* (1990) と 1980 年代末の東欧社会主義国家の消滅

(発表者) お茶の水女子大学博士後期課程 金田 迪子

(司会) 東京工業大学教授 谷岡 健彦

Caryl Churchill (1938-) の戯曲 *Mad Forest* (1990) は、チャーチルの同時代の政治情勢に対する関心をひときわ色濃く反映した作品である。発表の前年のルーマニア市民蜂起と共産党政権の崩壊を扱った本作は、チャーチルと出演者達が政変直後のルーマニアに赴き、市民への聞き込み調査を通して制作・上演され、1980年代末の東欧における社会主義体制の崩壊の状況を克明に描いている。戦後冷戦期が終焉を迎え、フランシス・フクヤマの「歴史の終わり」論に象徴されるように「民主主義の勝利」が謳われる中、本作は市民蜂起と自由化の理想化を避け、そのような言説に対して慎重に距離をとっている。本発表では、チャーチルが政変を綿密に分析するだけでなく、滞在制作や招聘公演という形で出演者・観客とルーマニア市民との交流の機会を創出することを通して、「民主主義の勝利」の言説に疑問を呈し、東欧社会主義国家の消滅に批判的な目を向けることを促していたことを明らかにしたい。

第2発表

否定・歪曲・パスティーシュ——*The Real Thing* と *A Map of the World* の劇中劇

(発表者) 東京大学博士後期課程 小田島 創志

(司会) 東京工業大学教授 谷岡 健彦

本発表では、Tom Stoppard の *The Real Thing* (1982) と David Hare の *A Map of the World* (1982) を取り上げ、そのなかの劇中劇が持つ意味や効果の比較検討を通じて、これらが Fredric Jameson の述べるポストモダニズムの特徴に呼応するような形で書かれていることを明らかにする。この2本の戯曲は初演の時期がほぼ同じであり、さらに芝居が劇中劇から始まるという構造上の類似点も見受けられる。本発表ではまず、「否定」、「歪曲」といった観点からこの2本の戯曲における劇中劇を検討していく。そして、*The Real Thing* では「否定」が、一方で *A Map of the World* では「歪曲」が、劇中劇を分析する際に如何に重要な観点となっているか明らかにする。さらに、こうした特徴のなかに、Jameson がポストモダニズムを特徴づける際に使用した「パスティーシュ」を見出すことができるという点に注目しつつ、Jameson の指摘するようなポストモダン的な社会に、Stoppard や Hare がどのように向き合おうとしているか分析していく。

第2会場 本館 1356 教室

第1発表

We are mediums: Ann Quin の *Passages* にみられる語るモノとしての存在

(発表者) 東京大学博士後期課程 西野 方子

(司会) 一橋大学准教授 川本 玲子

女と男の旅の様子を描く *Passages* (1969) は、戦後イギリスの作家である Ann Quin の三作目の小説である。本発表では、この作品の二人の主人公が自らを「媒介 (mediums)」と呼ぶことの意味を考えながら、この小説が物語るという行為を自己言及的に描いたものであることを論じる。語り手である主人公たちは、テレパシーによって個人的な夢やファンタジーを共有し合い、またそのことによって互いの自我の境界線が曖昧となった状態で存在している。このような語り手のあり方は、Nicholas Royle の論じる「語りという不気味な行為」を体現するものであり、この小説では彼らのあり方や語りを通して小説創作という物語行為が問い直されているのである。前作 *Three* (1966) と次回作 *Tripticks* (1972) との流れを踏まえつつ、テレパシーと語りの問題や、媒介としての主人公の身体および印字されたページでできた小説の物質としての側面に目を向けながら、この作品が浮かび上がらせる小説創作のあり方を論じて行く。

第2発表

Memento Mori における 1950 年代と高齢者問題

(発表者) 山梨県立大学助教 畑中 杏美

(司会) 一橋大学准教授 川本 玲子

Muriel Spark の *Memento Mori* (1959) は、1950 年代のイギリス社会を高齢者ケアの過渡期として描いた作品として読むことができる。物語の中心となるのは、70 歳以上の高齢者たちに “Remember you must die” と告げる怪電話がかかってくるという事件である。スパークの数ある作品のなかでも *Memento Mori* の最大の特徴はやはり、作中人物のほとんどが高齢者であるという点であろう。本発表の目的は、*Memento Mori* を当時の社会政策や逐次刊行物との考証におき、1950 年代の高齢者ケアに第二次世界大戦が与えた影響について考え、Spark が当時のイギリス社会をつぶさに観察して *Memento Mori* を執筆したということを示すことである。*Memento Mori* はこれまで、カトリック改宗者である Spark の宗教観を読み解くことができる作品として評価されることが多かったが、Spark の初期の傑作として評価を受けたのは、説得力のある形で当時のイギリス社会における老いが描かれていたからなのではないのだろうか。

第3会場 本館 1359 教室

第1発表

『靴屋の祭日』の祝祭性

(発表者) 東京大学博士後期課程 田邊 裕子

(司会) 慶應義塾大学准教授 小町谷 尚子

初期の都市喜劇のひとつとして数えられる『靴屋の祭日』(*The Shoemaker's Holiday*)は靴屋の主人サイモン・エアの出世物語である。作者トマス・デッカーは、15世紀に実在した人物を参照しながらも、既存の権力者としてロンドンの大きな業界に所属する現市長と公爵を風刺し、主人公の靴屋主人の偉大さと職人たちの精神性を讃える作品に仕上げている。当時のロンドンで工房や店の下働きをしていた労働者たちにとっての祭日(holiday)の解放感を芝居小屋で再現しながら、ロンドンの職人と商人たちの栄光に見合う象徴的立場として市長というポジションを位置付け、エアがそれを獲得する結末になっているのである。しかし、物語の展開は現実味に欠けるチャンスの到来に依拠するところが多く、そのせいで芝居全体が意図する祝福と景気づけも虚しいものになりかねない。本作品が現実味に欠けることについてはこれまでも解釈が積み重ねられてきているが、荒唐無稽な話の運びと虚しい礼賛が皮肉に転じ観客が興醒めしてしまいかねないことを考慮に入れると、本作がその現実味の欠落に拘らず上演中のように観客の信頼を勝ち取り、鑑賞と解釈の余地を示したのか、この問いを改めて考察する必要があるだろう。祝祭喜劇『靴屋の祭日』の祝祭性とは一体何に向けられているのだろうか。

第2発表

『テレニー』におけるテレパシー的「流体」と過剰な親密性

(発表者) 東京大学助教 中嶋 英樹

(司会) 成蹊大学教授 遠藤 不比人

作者不詳の小説『テレニー』(1893年)は十九世紀末のパリを舞台とし、語り手カミーユ・デ・グリュエとピアノ奏者レネ・テレニーという男性のあいだの恋愛を語る作品である。この発表ではまず、二人の登場人物が惹かれあう様子が「流体」に関する語彙で記述されていることを指摘し、そうした語句が、英国心霊学研究協会(SPR)におけるテレパシー研究(作品タイトルと共通の接頭辞に注目)に関連することを示す。二人の男性は親密な関係を結び、ポルノグラフィックな描写をもたらすが、つづいて、そうした場面での「流体」の語彙を検討する。他者とのあまりに親密な関係は、他者を消失させかねないという逆説的な事態が明らかになるだろう。最後に、本作の語りをいま一度、テレパシーおよび親密性という観点から検討する。回想の語り聞かせという構成は、親密な関係を構築する有効な手立てとなるが、そうして築かれる親密性はいったい誰と結ばれるのか。

【英米文学部門シンポジウム】 14:00-16:00 2号館 2101 教室

ヘリテージ映画と国家のイメージ——それはいかに原作をアダプトしているのか

(司会・講師) 法政大学教授 丹治 愛

(講師) 立教大学教授 小山 太一

(講師) 早稲田大学非常勤講師 岩崎 雅之

Andrew Higson は、1980 年代以降の英国の映画のうちで、第二次世界大戦以前の過去の英国を舞台にしている映画を「ヘリテージ映画」と呼び、その形式的内容的特徴を記述している。英国の過去が、ロングショットを多用した美しい映像をとおして、ポストモダンな「イメージのコレクション」へと昇華され、ノスタルジックなまなごしを誘う——そのような過去の表象の仕方が、ヘリテージ映画の重要な示差的特徴であるとしている。

他方、ヘリテージ映画は、英文学の文学的ヘリテージとしての Shakespeare, Austen, Hardy, James, Forster 等の作品をしばしば原作として用いる。多様な作家たちが提示する過去のさまざまな英国が、ヘリテージ映画にアダプトされるとともに、同じようにノスタルジックなまなごしを誘うイメージになるということがどうして可能なのか。そこにどのようなアダプテーションの工夫が施されているのか。それとも「ヘリテージ映画」とは、その定義が個々の映画によって裏切られつづけている幻のジャンルにすぎないのか。

モダニズムとポストモダニズムの時代のイギリス小説を原作としたヘリテージ映画の具体的な解釈をとおして、そのような問題を考えていきたい。

回帰する／させられる記憶——*The Return of the Soldier* とヘリテージ映画の関わり

立教大学教授 小山 太一

文化的・社会的な継承のイメージをノスタルジックに喚起し、観客の意識の底部に沈んでいたナショナル・アイデンティティの伝統についての認識を再浮上させるもの——と、そのようにヘリテージ映画を定義するならば、そこには、忘却および記憶の回復のプロセスが深く関わっていることになる。ヘリテージ映画のノスタルジアが広汎な観客層に新鮮なアピールを持つためには、前提として忘却と断絶が存在しなければならないのではあるまいか。本発表は、Rebecca West の *The Return of the Soldier* (1918) および Alan Bridges 監督によるその映画化 (1982、日本公開時の題名は『戦場の罌』) を題材として、主人公の記憶の喪失と (自発的および強制的な) 回復という原作のプロットが、ヘリテージ映画のいわば主戦場たるカントリー・ハウス／カントリーサイドの映像による表象とどのような関係を取り結んでいるかを考察し、ヘリテージ映画というジャンルにおける記憶の回復 (ないし創造／捏造) という問題に接続することを試みるものである。

ナショナル・アイデンティティの再構築を図ったとされる「ヘリテージ映画」の中で、一際目を引くのが、批評的にも商業的にも成功を収めた E. M. フォースター原作の『ハワーズ・エンド』（1910, 1992）と『インドへの道』（1924, 1984）である。ポストモダンの時代において、フォースターの作品はイギリスの遺産として認識されているが、原作のナラティブの持つモダニズムと伝統の緊張関係が、ヘリテージ映画のナラティブによって、どのように過去への郷愁を誘う「イングリッシュネス」に翻案されているかについては十分に検証されてこなかった。端的に言えば、『ハワーズ・エンド』の主題は「誰がイギリスを継承するか」だが、ではヘリテージ映画はその問いに対してどのように答えているのであろうか。原作と映画の間に横たわるナラティブ上の差異を炙り出すことができれば、その問いに対する答えと、ヘリテージ映画の制度的特徴が見えてくるはずだ。この検証を通じ、ヘリテージ映画の理解に対する新たな道筋を示すのが本発表の目標である。

カズオ・イシグロ『日の名残り』と田園のイングランド

法政大学教授 丹治 愛

『日の名残り』（1989）は、1920年代と30年代の戦間期イングランド——その中央部に位置するオックスフォードシャーのカントリー・ハウス——を舞台にした小説である。その屋敷の主はダーリントン卿であるが、ナチス・ドイツにたいする宥和政策を積極的に支持した第二次大戦前の彼の活動は、彼の死後の1956年、屋敷がすでにアメリカ人富豪のものとなっている時点から、それを回顧する執事スティーヴンズの信頼できない記憶をとおして語られていく。この小説はサッチャー政権下の1989年に出版されたあと、ジェイムズ・アイヴォリー（監督）、イズマイル・マーチャント（製作）、ルース・フラワー・ジャブバーラ（脚本）というヘリテージ映画トリオによって1993年に映画化される。

サッチャリズム体制のなかで出版され映画化された『日の名残り』は、いったい過去のイングランドをどのようなイメージで描きだしているのだろうか。19世紀末以降の田園主義的イングリッシュネス概念構築の歴史のなかにこの作品を位置づけることによって、ヘリテージ映画の特質の一端を浮かびあがらせてみたい。

【英語教育部門シンポジウム】 14:00-16:00 2号館 2102 教室

英語教育と文学教育のはざままで

(司会・講師) 杏林大学准教授 倉林 秀男
(講師) 千葉大学准教授 山本 裕子
(講師) 筑波大学助教 河田 英介
(指定討論者) 東京女子大学教授 原田 範行

文部科学省のグローバル人材育成推進事業やスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として、大学の英語教育の抜本的改革が行われている。さらに、教職課程の質保証を目指す「コア・カリキュラム」を導入して、英語教員養成課程の改革が予定されている。こうした一連の改革は、一般的な英語教育のみならず、専門教育においても「英語が使える人材育成を」という一貫した方針が貫かれている。結果としてこれまでの教授法や、使用教材・題材について多くの英語教員が再考する必要性に迫られている。そこで、本シンポジウムでは、それぞれの教育実践を通し大学における英語教育と文学教育の効果的な相互作用について考えてみたい。文学テキストを教材としてどのように教えるのかについて、異なった観点から 3 名が報告し、原田範行日本英文学会会長を指定討論者として、登壇者だけではなくフロアの皆様とのディスカッションを通して多角的に英語教育と文学教育の連係について考えてみたい。

コア・カリキュラムにおける文学の扱いについて——言語学的に考えてみる

杏林大学准教授 倉林 秀男

英語教員養成課程のコア・カリキュラムにおける「英語文学」は「英語で書かれた文学を学ぶ中で、英語による表現力への理解を深めるとともに、英語が使われている 国・地域の文化について理解し、中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる」という目標が設定されている。そこで、本報告では教職課程における文学の授業の扱いについて、①表現力の理解、②中学・高等学校における外国語科の授業に生かすという 2 つの点について具体的にどのようなことかについて提示してみたい。特に、Leech and Short の *Style in Fiction* (2007) で提示している文体チェックリストを利用してその方法論の妥当性を考察したい。

英語教育と専門教育の架橋をめざして——CLIL 理論によるカリキュラム策定と授業実践

千葉大学准教授 山本 裕子

昨今、文部科学省のスーパーグローバル大学等事業にみられるように、学生のグローバル対応力育成という観点から、これまで以上に世界共通言語としての「英語」の重要性が強調されている。こうした中、英語で教授される授業科目群が新設される等、様々な大学のカリキュラムにおいて「授業の英語化」への改革が進んでいる。同時に、「英語で授業ができる教員」の需要が、従来以上に高まっていることは言うまでもない。

カリキュラム改革の方向性の是非や教員に対する要求の妥当性はさておき、英語による教授法の有効性に関する議論なしに授業の英語化は望めない。上智大学がいち早く全学英語教育に導入した CLIL (Content and Language Integrated Learning) は、語学教育と専門教育を同時に行う優れた教授法として注目を浴びている。本報告では、小規模私立大学の英語英文学科における CLIL 理論によるカリキュラム策定と授業実践を紹介することにより、英語による教授法としての CLIL の有効性を検証し、英語教育と専門教育を架橋することの意義と可能性を探りたい。

実践的ツールとしての文学的想像力・行動力の涵養——英語教育の目標をさらに高い次元で達成する

筑波大学助教 河田 英介

現在の英語教育は、グローバル労働市場の急速な拡大が要請する実践的英語を習得させるために、従来の読む・聞く・話す・書く「四技能分離型」教育から、文部科学省が唱導する「コア・カリキュラム」に代表される「四技能統合型」教育へと目下移行中である。その趨勢の中で、英語教育現場では文学テキストを英語教材として用いることの効用がますます過小評価されつつある。しかし文学教育の目標である異文化・他者に対する共感力と交渉力の涵養は、本来、英語教育のそれと共通の宛先をもち、グローバル労働市場において第一義的に必須となる、異質な他と共生・発展していくための「実践的ツールとしての文学的想像力・行動力」を育んでくれる貴重な効用である。それ故本報告においては、英語教育現場において文学テキストをどのように活用することで、英語教育の目標をさらに高い次元で達成しうるのか、現代アメリカ作家のテキストを用例に論究したい。

【特別講演】 16:15-17:45 2号館 2302 教室

Sensibility, slavery and empire

(講師) Markman Ellis
Professor of Eighteenth-Century Studies
Queen Mary, University of London

(司会) 学習院大学准教授 吉野 由利

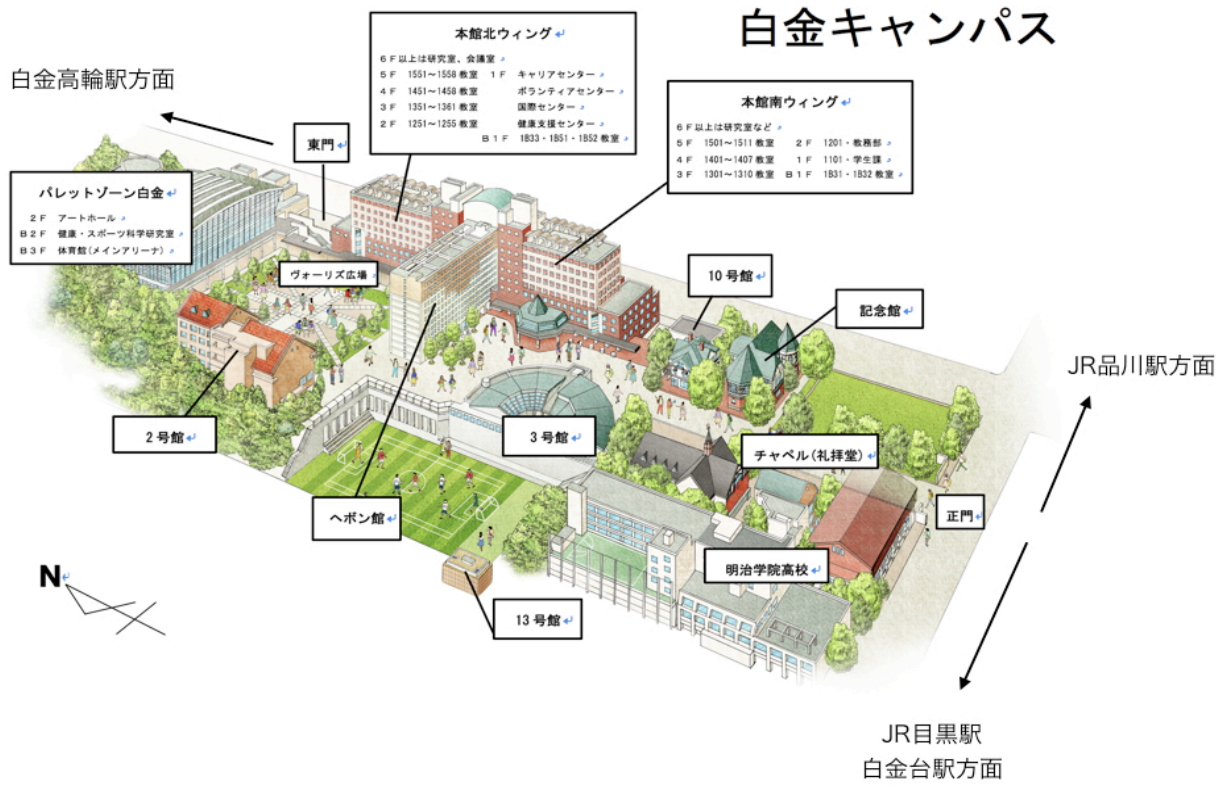
This lecture would explore the mode of sensibility in fictions that discuss slavery by British women in the late eighteenth century, including Sarah Scott's *Sir George Ellison* (1766), and Maria Edgeworth's *The Grateful Negro* (1804). In a period when the colonies, especially the sugar plantations in the Caribbean, were understood to be greatly increasing the prosperity of the British Isles, the topic of slavery, in its moral, political, and practical aspects, became the focus of concerns about the morality of empire. These novels, and the discourse of sentimentalism, played an important part in raising public awareness of the scandal of slavery.

懇親会 (18:00-20:00)

会場 本館 10 階 大会議室
会費 : 4,000 円 (学生 2,000 円)

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

キャンパス・マップ



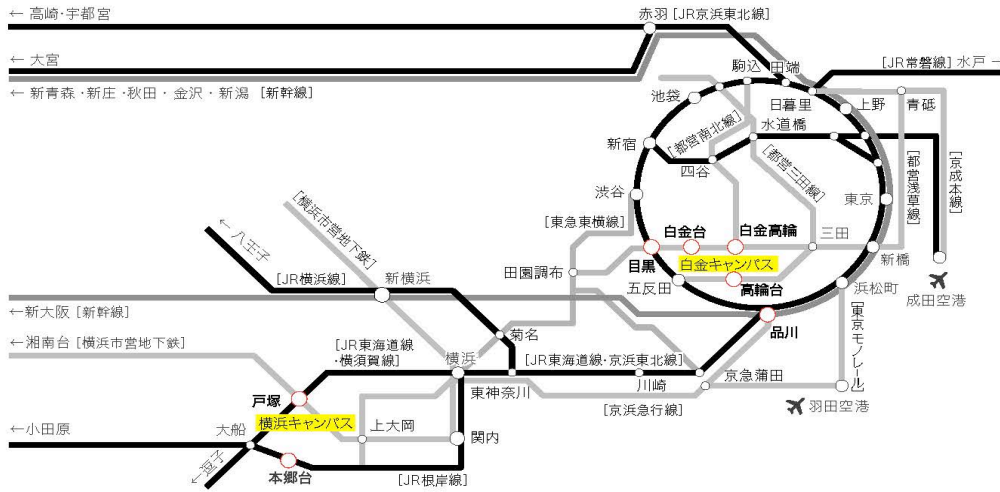
本館 : 受付 (11:30-13:45) ・発表会場 ・懇親会会場 ・書店展示場

2号館 : 受付 (13:45-17:00) ・シンポジウム会場 ・講演会場 ・書店展示場

会場アクセスマップ



白金キャンパス 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37



最寄駅からのアクセス

- 品川駅から
[JR 山手線・京浜東北線・東海道線・横須賀線・東海道新幹線 / 京浜急行線]
高輪口より都営バス「目黒駅前」行きに乗り、「明治学院前」下車 (乗車約6分)
※徒歩約17分
- 目黒駅から
[JR 山手線 / 東急目黒線 / 東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線]
東口より都営バス「大井競馬場前」行きに乗り、「明治学院前」下車 (乗車約6分)
※徒歩約20分
- 白金台駅から
[東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線] 2番出口 (白金高輪側 / エレベーター有)より徒歩約7分
- 白金高輪駅から
[東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線] 1番出口 (目黒側 / エレベーター有)より徒歩約7分
- 高輪台駅から
[都営地下鉄浅草線] A2番出口より徒歩約7分

主要駅からのアクセス例



キャンパス間のアクセス

